

刊 行 の こ と ば

松 本 千代栄

民俗と芸術、自文化と異文化、更に伝承と教育など、舞踊の時空を視野に入れて「舞踊学会」Japanese Society for Dance Researchは、論じる側、演じる側を擁し、人間存在と舞踊文化の意味を問い、“舞踊学”を顕在化すべく設立された。(昭50, 1975)

この度、舞踊学会設立20周年を機に、春秋年2回の大会で実施された学会企画の内容を集成・総覧し、舞踊学の回顧と展望に資することになった。

「シンポジウム特集」の刊行である。

企画は、学会各大会のシンポジウム主題を整理・統合して次の3巻にまとめ、

1巻 近代舞踊の出発と達成

2巻 舞踊の現在——現状と問題

3巻 舞踊への接近——現象とその研究法

更に、「シンポジウム一覧——講演・実演・映像鑑賞・見学等を含む——」として、第1回(1976)から第46回(1998)までに実施された内容の全貌を題目上に概観できるように添付した。(第1巻所収)

各学会企画の内容は、担当理事の視野と識見を持って立案され、理事会の議を経、演者と開催地関係者の協力によって実現された。各内容は、シンポジウム主題を核として、基調講演をもち、主題にかかわる演や映像、また見学等を加え、論究と感受の両側からの接近が計られている。

シンポジウム一覧には、第1回シンポジウムは、草創の気概をうけて“舞踊学の課題”を掲げ、比較文化の知見をひろげて回を重ね、第27回(1989)からは、「われわれの時代にとって舞踊とは何か」の共通主題を掲げて、舞踊研究の成果を共通の視座のもとに糾合し、知と感性の覚醒の場として、舞踊学の開発・深化をはかってきた足跡をみることができる。

更に、各巻におさめられた各演者の論考は、ご専門の立場から、主題と当代の問題意識をとらえての論究として今日に裨益するものであろう。記録の消失など、不備な部分も残しながら、可能な範囲で再録し、その折々の問題提起と諸学からの接近の様相を摂取できるように努めた。

歴史は、顧みることによって歴史になるといわれる。ここに提出された学会20年の一つの足跡が「舞踊学」の確立の初志を伝え、かつ、より深い思索を啓く契機となるよう期待し、願っている。

同時に、舞踊学の進展が、人間存在と舞踊文化の^{メカニズム}機制をより明らかにし、より豊かな人間社会を築く美と感動の基層を保証するものとなるように願っている。

終りに、この年月にいただいた多くの学識に対し、また本刊行を可能にした全理事と関係の方々にあらためて、誌上をかりて御礼を申しあげたい。

(学会会長・刊行委員長)